

研究ノート

バリの風土と家系についての考察 (X)

松原正道

序

前稿では、日本（大日本帝国）の明治維新以降の対外進出策、朝鮮半島、中国大陸、特に、東北部（満州）を重視する「北進論」と、これに対する東南アジア方面を重要視する「南進論」を信奉する者同士が、それぞれの主張を激化させ、その相剋の中で互いに既成事実を作ることに躍起となっており、そうした事情の下でのインドネシア地域、バリ（島）の状況について、特に、日本軍統治下の陸軍憲兵隊、海軍警務隊（特警）を始めとした日本人（軍）の在り方について考察した。

バリ（島）における日本兵の在り方については、クランビタンの領主だったオカ・シラグナダ氏邸での米の収穫時のトラブルや、ドクター・グデ・グリアもいっているその厳しさについては既にふれたとおりである。

だが、この厳しさについては、一つバリ（島）におけるだけではなく、どの地域、地方においてもいえるのであって、更にいうならば、日本の軍隊の在り方、その基本的在り方にこそ全ての原因があったといえるのである。

その基本となり代表的なものとなるものとして、兵士、それ以前の人間として生きるうえでの最も重要な問題となる食糧問題について、世界でも珍しい「主食」という概念をもつ日本において、「米」にそれをあてているのだが、その「米」を中心とした食糧問題は人口と比較して充分ではないといった食糧に対する欠乏感が、満蒙開拓にその代表例がみられる日本の対外進出策の根本としてあったといえるのである。

そして、その延長線上に軍隊における食糧の現地徴達（発）という考えが生まれるのだったが、この食糧の現地調達（発）にこそ、当該地における日本人（軍）と現地住民との間の諸問題の根元があったといえるのである。

現地に食糧が充分あり、日本人（軍）にもゆとりがあった場合には、その調達にも妥当な取り引きが行われたのであるが、互いにゆとりがなくなってくると、これが崩れ、その調達のために強制が加わり、ひいては、掠奪行為も至極当たり前のように行われてしまうのだっ

た。それは、個人的にも組織的にも。⁽¹⁾

そして、それに伴って、深刻な反動がもたらされることになるのだった。

その上、更に、日本人特有の精神主義とその反面にある物質（資）の軽視、それは、国内にいた我々日本人にも、戦時下、「欲しがりません、勝つまでは」ということで我慢を強い、「食」の貧困をもたらしたのである。

そして、食糧の現地徴達（発）とそれに伴う日本人（軍）の在り方が現地の人々とのトラブルを生じさせ、ひいては、日本人（軍）に対する抵抗、反日活動へと発展させるのだった。

合理が働かなかったのである。

本稿では、そうした日本統治下時代を含む昭和年代中期のバリ（島）における日本人について、特に、三浦襄氏とバリ（島）の人々との関わりについて舟木麻左氏の著書『バリ島の日本人』を通して考察を加えたいと考えている。併せて、既に取り上げたハンナの当時についての記述を参考に、バリ（島）、インドネシアと日本との関わりについて考えてみたい。

本論

I

Life in the 1930s : Japanese Occupation

1930年代のバリ（島）での生活は、裕福な外国人だけではなく、バリ（島）の人々についてもいえるのだが、特に、外国人は、役人や海外駐在員の平均である月約150ドルの収入で以て、その生活は快適そのものだった。それは、家庭を維持するために必要な車の所有、半ダースにもなる数の家事手伝い、そして、豊かな食事を賄うのに充分だったのである。

バリ（島）の人々、中でも、王族の家族の多くは裕福であり、彼らなりの特権を有しており、バリ（島）特有の快適さを満喫すると共に、輸入された贅沢な品々を持つことで以てその生活を楽しんでいたのである。

彼らのプリPuri（王宮、館 筆者注）には快適な居間だけではなく、来客用の素晴らしい部屋があり、その館には沢山の金や宝石が宝物として蓄えられていたのである。

一般の人々にしても、相対的には不満があったとはいうものの、米を充分もっており、彼らの不満は、ラジャRaja（王、藩王、領主）やオランダ人によりも、むしろ、表向きには寛容に遇されていたといわれている、中国人の金貸しに対してのものだったのである。

王（領主 筆者注）達自身は、1939年の「自治政府法」Zelf Besturs Regelen of 1939（Rules of Self Government）という非常に歓迎されたオランダ人によって行われた行政改革に感謝していたのである。それは、中央政府と地方政府との間の権力の分離と分割、コントロリエールControleurをコンサルタント（顧問）の地位に降ろしたことで以て、殆ど自治体のように

なっていたということにより、統治は旧に復していたからである。

また、例えば、月約25～50フローリン（10～20ドル）よりも多く稼ぐことはなかったが政府事務所に雇われていた人達のような、バリ（島）の人々の中で中流階級をなしている極く小さな集団は、人々から尊敬もされ、彼らはそれで充分生活ができていたのだった。彼らは、見苦しくない家の借用のために数ギルダを支払い、家族全員の日々の食糧を25ギルダセントで手にいれていたのである。

1930年代のバリ（島）に住む外国からきた住民の関心事は、太平洋における戦争についての予想のみ終始しており、1941年12月にそれが突然、現実のものとして起こることになる恐怖についてだった。

日本軍は、この地域の要衝であるシンガポールを包囲するために進軍を始めたのだったが、それは、弱体な防衛体制のインドネシアの島々を危険に曝すものだったのである。

戦争が勃発した時、バリ（島）にいるヨーロッパ人の多くはジャワ（島）に避難場所を探したり、オーストラリアへの脱出の旅を試みるのだった。

日本人（軍）が接近するにつれて、陸軍の守備隊に配置されていた少数のバリ人のオランダ軍将校は、実際に、その立場をすてて、戦後の軍事法廷にその身をおくことになる、文民の脱出と行動を共にしたのである。

そして、1942年1月14日、少数の日本軍の偵察隊がバリ（島）に現われ、2月18日には陸軍がサヌール（海岸）に上陸したのだが、士気を失っていたオランダの兵隊達はなんの抵抗もすることなく降伏したのだった。



写真1

サヌール海岸（バリ島東岸、日本陸軍上陸の地）

日本人によるバリ（島）の占領は、ジャワ（島）のそれよりも数週間早く行われたのだが、他の何処にもみられることのない殺戮がないままに、1945年にそれは終結したのである。

オランダ人によって既に確立されていたシステムに則った、日本人（軍）の統治下での

バリ（島）は、実際、1938年に行われた行政改革の前の状態に戻ることにしたのである。日本の軍政政府は、オランダ人がいなくなったオフィスを占拠し、日本の地方官（bunken）が、オランダのコントロリエールによってなされていた、少なくとも形式的には、それぞれが同じ権限を持っていた各王室と接触を持つのがだった。

だが、ギャニャールのラジャ（王）は頑迷（固）だったため、退位させられ、ロンボクへ追放され、代ってその年かきの息子が位についたのである。

他のどのラジャも同じような扱いを受けることはなかったが、ギャニャールの若くて新しいラジャだけは、事実上、従属的立場に立たされ、意図的に懲罰をうけたのである。

非常に限られた範囲ではあったが、ジャワ（島）におけるのと同じように、日本人（軍）は、それ程重要ではないものには、バリ（島）の人々自身をオランダ人に代えて、事実上、責任ある立場につけたのである。そして、多くの場面において、日本人（軍）は、そこには、それなりに一寸とした理由があったために、積極的に干渉することをしなかったのである。バリ（島）の社会や経済についての限られてはいたが近代化された面の殆んどは、はずみで以て機能してはいたが、徐々に低下していき、終いには、より大きな町々の全てにおいて殆んど公的サービスが崩壊させられた時にそれは停止に追い込まれるのがだった。

占領によってもたらされた最も深刻なものは、日本人（兵）によって、米を始めとする食糧、織物、薬、加工品等の徴達（発）と、それ迄使われていた機械部品を交換するための部品やスペア・パーツの供給がうまくいかなかったことである。従って、戦争が終結した時、バリ（島）の人々は大変厳しい物資の欠乏と、飢饉や伝染病についての非常にさし迫った状態に直面させられたのがだった。

勝利をえた連合国の最初の人間がバリ（島）に現われたのは戦争が終結して4ヶ月経ってからのことである。イギリスとアメリカの少数の将校の集団が12月の後半に潜水艦でやってきて、日本人捕虜の引き渡し、オランダ人の搜索、戦争捕虜を探索するために島に数日間滞在しただけだった。

しかし、実際には、捕虜や日本人（兵）は、既に、バリ（島）の人々によって収容されており、その武器の多くは快く、また、一面、しぶしぶ彼らに引き渡されていたのがだった。⁽²⁾

Return of Dutch ; National Revolution

オランダ人は1946年3月の始めにバリ（島）に戻ってきた。それは、最初、ビルマやシャム（タイ）における日本の捕虜収容所から解放されたばかりの将校達で、その下に、主として、アンボンの人々からなる「ガジャ・メラ」（赤い象）連隊ex-K.N.I.L（Colonial）を伴った行政官の小さな集団がいたのである。

バリ（島）における政治的、また、軍事的権威者としての立場の再構築の中で、オラン

ダ人は相対的には何がしかの抵抗をうけはしたものの、バリ（島）の人々からは全く歓迎されないということはないという程度で受け入れられ、独立運動はさ程強いものではなかったのである。バリ（島）の人々はインドネシア民族革命に対しては、最大の距離をおくと共に、注意を払いながらも離れた所からみている傍観者だった。それは、ヒンズー教のバリ（島）にとっては、全くアイデンティティのないイスラム教徒（ムスリム）のジャワのことであるということによって理解されるのである。

バリ（島）の人々の中の極く少数の者は、その物の考え方や人格の点からいって、多少の知識があるということによって、共和主義（者）の革命に何かしら特別の興味をもっていた者もいたのである。

バリ（島）の人々による解放運動についての動きは、既に、新しく宣言されていたインドネシア共和国と連携し、オランダ人や日本人によって、以前、その役割を担われていた基本的な行政組織を確立することを以て始まっていたのである。そして、それは、オランダや日本の軍事派遣団によって訓練された戦闘を熱望していながらも、多くは経験不足な血気盛んな若い志願兵の男達によって成り立っている、未熟な軍隊によって支援を受けていたのだった。

この解放運動は、日本の支援の下での独立国家樹立のための準備に従って、諸島各地からインドネシア人の代表のグループをバタビアへ日本が招集した、1945年の夏から始まっていたのである。バリ（島）からは2人の代表が送られていたが、彼らは戦争が終った後、独立宣言まで首都にとどまり、国会議員となったのである。

新しいインドネシア政府は、バリ（島）の立場を尊重して、卓越したバリ（島）の人であるイ・グスティ・クトゥット・ブジュを知事として任命し、その地方自治政府は彼のリーダーシップの下で発展をみたのだった。

そして、バリ（島）軍将校ヌグラ・ライ大佐は、様々な人々を志願兵としてバリ（島）軍に徴募して、プラジュラ・コープス Prajura Corps というバリ（島）防衛軍を編成するのだった。だが、そのためにオランダ人が戻ってきた時、多くの文民は、その中に参加していた知的エリートの少数の集団と共に投獄されることになるのである。

しかしながら、ヌグラ・ライ率いるプラジュラ・コープスは、丘陵地に立てこもり、以後、そのメンバーはそこを拠点にして小さな事件を起こしたり、有力な市民に対して説得をしたり、脅迫したりする姿勢を明確にするのだった。

しかしながら、未だ、3月の早い時期に、非常に短い時間だったけれども彼らは、タバナンの近郊で非常に強力なオランダ軍を攻撃したのである。それは、現代のププタンということを出させるものであり、既に、明らかになっている戦況においてでさえ、自らを生贄に捧げるといふかのようなものであり、大佐とその部下達の多くは殺され、そこに埋めら

れ、現在、そこには、社が祀られており英雄達の墓地があるのである。

オランダ人に対する組織化された全ての抵抗は、軍隊の脱落で以て崩壊するのだった。

小規模な無秩序はその年の終り迄続き、たまにはオランダ人に対しての抵抗もあったが、その多くはバリ（島）の人々同士が争うものだったのである。

バリ（島）の人々の少なくない者達は、革命的な政治に対するものよりも、個人的、家族的、そして、村に帰属することによって関わりを持つことになる古くからある現実の問題を解決させるために武器を簡単に活用できる機会をえたかったようである。

しかし、バリ（島）では、ジャワ（島）においてのように深刻で長続きする暴動が起こる前に、その擬似体験からうまく平和な状態に戻る事が出来たのである。

オランダの植民地主義の復活は、短い間のものであり、そこには古い型の束縛と新しい形のものとの両方の実験的なものがもたらされたのだった。

島は、オランダ人の役人とそのスタッフによって、新しい本拠地であるブレレンではない、空港に近いデンパサルにおいて、再び、レジデンシー行政が施行されることになったのである。

スタッフは以前より大規模になり、そこには、医師、教員、エンジニア、農学者、経済学者、科学者、伝道者が含まれており、それは軍隊によってバックアップされていたのだった。

オランダの地方官には、もはや、1938年代以前のコントロリエールの力や権力はなくなっており、それは8つの王国それぞれに割りあてられることになったのである。従って、そのためにラジャ達はそれぞれ、1938年の植民地行政改革によって彼ら自身に与えられた権限に従ってその王国を支配したのである。それは、オランダの行政上の権限の下でのものではあったが、全ては順調かつ協力的に進められていたのである⁽³⁾。

II

後に校閲部長になる読売新聞社の記者で、昭和18年秋にバリ（島）に渡り現地語新聞発行に携わった舟木麻左（正義）氏は、その著書『バリ島の日本人』の中で、小説の形をとりながら、バリ（島）における日本人、日本兵と現地の人々との関わりについて、いささかの批判をこめた記述をしているのである。

日本人、日本兵のバリ（島）についての無知、これについては舟木氏自身も、「私は、バリ島に赴任して、現地語の新聞をつくることになっていた。が、現地語は皆目分からなかった。行けばなんとかなるという安易な気持ちであった。」⁽⁴⁾と記しているのである。

このように現地の事情、その住民について無知であるにも関わらず海外へ出かけていった者が多い中、バリ（島）についても例外ではなく、バリ（島）、バリ（島）の人々を理解し

ようとしないうで、支配者としての立場の確立と自らの統治を成功させるために現地の人々、それは、バリ（島）の人々であれ、隣りのジャワ（島）の人々であれ、インドネシアの人々に対して、オランダからの独立という目標をもたせることを以て、これを利用しようとしたのである⁽⁵⁾。

そして、それは、特に、バリ（島）についていえることであるが、イスラム教徒が世界一多いといわれるインドネシアにあって、ヒンズー教の世界と一口でいえるバリ（島）においては、ジャワ（島）の人々に代表される他の地域の人々と一緒に扱われることには、いささかの戸惑いを感じさせられるのだった。

現在でも、バリ（島）の人々の中には、隣りということでは往来も多いこともあって、ジャワ（島）の人々に対して一種の猜疑心をもっている者もあり、犯罪等でバリの社会を悪くしているのはそうした他の地域からきた者（達）だといひ、端的にジャワ（島）人だともいうのである。

沢山の島々を抱え、それぞれ独自の風俗・習慣、伝統・文化をもつ様々な民（種）族、今日では、インドネシア共和国からの独立を願っている人々もいるというように、これらを「独立」という目標をもたせることで一つのインドネシア人として扱おうとしたこと、これは結果的にインドネシアに「独立」をもたらしたはしたが、バリ（島）の人々にしてみれば、ハンナも指摘している如く、アイデンティティのないイスラム教徒であるジャワ（島）人等島外からの人々と一緒に考えられることには、それが長年にわたって自分達を支配してきたオランダからの「独立」であったとしても嬉しくない話だったわけである。

バリ（島）の人々にいわせると、それが良いか悪いかは別にして、ヒンズー教に基づく4つの階級に根ざしたバリ（島）の在り方、風俗・習慣、伝統・文化を理解しないジャワ（島）人等、他の地域の人々によってこれが崩されてきているところに、日本人（軍）による対応はそれを一層助長するものだったとするのである。

筆者も目撃したのであるが、バリ（島）では、原則的にはないとされているのだが、未だに、4つの階級、ブラフ（ホ）マ（僧侶階級）、サトリア（武士階級）、ヴァイシャ（商工業者、庶民）、ス（シュ）ードラ（農民、隷属民、召使い）という身分制度に基づく風俗・習慣、伝統・文化が残っており、スードラといわれる人達が上位者、特に、ブラフマやサトリアに対しての接し方は、我々日本人にも分かるもので、腰をかがめ、右手を低く前に出して、ヤクザ映画にみる仁義をきるような恰好をして話をし、言葉は分からないが、上位者が下位者に話す言葉、下位者が上位者に話す言葉、上位者同士の話し方があるとのことである。

こうした言葉（遣い）にもみられる古来の風俗・習慣、伝統・文化を持っていたバリ（島）は、その上、8つの国々に分かれていたのである。そうしたところに、突然やってきた日本

人（兵）が、独特のバリ語を話すというような風俗・習慣、伝統・文化をもつバリ（島）の人々に対して、平等という聞こえはいいがイスラム教を主とするジャワ（島）等の人々と分け隔てなくインドネシア人として扱い、かつ、オランダの軛から解放されるという「独立」という方向性（目的意識）をもたせることで以て、同じように統治に協力させようとしたことは、それぞれの風俗・習慣、伝統・文化を平準化させ、希薄なものにし、ひいては、その破壊につながることを助長させることにもなるのである。

その点は、人の行き来が増えれば増える程この傾向は否定しえないといわざるをえないのであるが、既にみた如く、イスラム教がインドネシア地方に伝わった際、多少のトラブルはあったものの、それを信仰していた商人達によって自然な形で以て広まったといわれているように、それが自然な形で行われている間は良いが、例えば、信仰に燃えた人間が使命感を以てこれをした場合、そこには、善し悪しは別として、古来伝わる風俗・習慣、伝統・文化を無視し、時には、これを攻撃し、自らの信仰を強要することがあるのである。

その点で、物事が意図的に行われた場合はそこに何がしかの抵抗が生じるのは致し方のないことで、舟木氏の小説は、その辺りのことをバリ（島）の女性の口を介するという形を通して、やんわりとした形を以て批判していると受けとれるのである。

国際化、グローバル化の必要性が声高かにいわれているのだが、その持つ大きな問題点として、それぞれに古来伝わる風俗・習慣、伝統・文化の希薄化、変質、破壊があるといえるのである。その一例ともいえるのが、世界を席捲しているマクドナルドやコココーラに代表されるファースト・フードの導入、これに象徴される我が国の「食文化」の変化は、古来、神につながるものとして崇め、これを守り継いできた「米」、 「稲作文化」、 「米文化」に変化を生じさせ、今や、「米離れ」、 「米余り」現象を生んでいるのである。

そして、この国際化、グローバル化の究極の所に位置しているのが戦争といえるものによってもたらされるそれであるといえる。そして、これには、常に、暴力が伴っているのである。

それ迄は、全く未知の世界であり、将校といえども一部の者を除いて、一生のうちに絶対に行くことがないだろうと思われた地に、兵士として連れていかれ、その点について、日本の軍隊では連れていかれた兵士自身、軍の機密ということで、その行き先が仲々知らされなかったといわれているのであるが、連れていかれた先で戦争目的に従って自らが持つ考え方、風俗・習慣、伝統・文化を、現地の人々が好むと好まざるとに関わらずに持ちこむことになるのである。

アレクサンドロス大王は遠征に多くの学者を伴いそれぞれの地域についての研究をさせ、作戦に資したと伝えられ、また、ナポレオンもエジプト遠征に多くの学者を連れて行ったといわれているのである。

それぞれの風俗・習慣、伝統・文化の象徴といえるものとして日常化しているのが「言葉」と「食」であり、日本人（兵）は出向いた（派遣された）バリ（島）で、「言葉」、「食」を始めとする日本の風俗・習慣、伝統・文化を土地の人々に披露し、時に、強要するのだった。

その例としてあげられるのが既に本稿Ⅷでふれた鈴木政平氏等による教育を中心とする同化政策で、氏等はその仕事に使命感を持ち熱心にこれに携わったのである。だが、彼らが熱心であればある程バリ（島）の人々に日本の風俗・習慣、伝統・文化を強要することになるのであって、その分、バリ（島）に古来伝わるそういったものを疎外することにもなるのである。

タバナン（王国）のクランビタンの領主の一人だったオカ・シラグナダ氏から、日本統治時代に習ったという「真白き富士の嶺」等の歌を度々聞かせてもらった。併せて、「キオツケー」といった号令等々も。

日本人（兵）にとっては至極当り前のことであっても、バリ（島）の人々にとっては違和感を以て受けとめられたものも多かったことだろう。それも抵抗感をもって。

前稿でも記した、バリ（島）の人々が歩哨に立っている兵隊に挨拶しなかったために怒鳴られ、特に、頭に物をのせて歩いている女性にとっては大変なことだったわけである。

日本（人）の挨拶は頭を下げるのである。最近、若者は頭を下げる者が少なくなった。中にはアメリカ人の真似をしてか「ハイ」といってお互い同士挨拶をしている者もいる。

こうした日本式の頭を下げて礼をする挨拶について、「施先生（^{さてるひさ}施光恒九大大学院准教授）はイギリスに留学していたとき、『日本人はまだお辞儀をしているのか』『いつになったら握手に変わるのか』とからかわれたそうだ。欧米の人々にとっては隷従の証しであり、奴隷の^{あいさつ}挨拶のように映るらしい。しかし、日本人が今もお辞儀をするにはわけがある。

高温多湿な日本の夏は肌がべたべたし、食べ物は腐るので疫病がはやる。この夏への恐れが日本人を無類の清潔好きにした。挨拶も握手や抱擁のように体を触れ合うのではなく、少し離れたままお辞儀をするようになったのも夏への恐れのためだろう。

お辞儀は互いに頭を下げるので二人のあいだに一定の間がなければならない。あまり近づくと、頭がぶつかってしまう。お辞儀は親しみのある表現であると同時に『これ以上、近づかないで』という無言の合図でもある」（俳人 長谷川権「私の収穫 お辞儀と挨拶」朝日新聞 2009年10月15日 夕刊）という文章があった。

これは日本人、日本文化の本質をついているともいえる。

風俗・習慣、伝統・文化というものはそれぞれの土地、風土、環境によって異なって自然発生的に起こり、それが長い年月にわたって踏襲されてきたものであって、それに対して他の価値観を持ちそれに従った風俗・習慣を持った者が、違和感を持ったとしても兎や角いう

ことではない。筆者も外国で髭をはやした男性から頬ずりをされた時には戸惑いを感じたものだった。

頭に物をのせて歩いていた女性は困っただろうし、怒鳴られたことで恐かったことだろう。

こうした、一面、些細なといえることから他の風俗・習慣、伝統・文化に接し、それを認識していくのであって、「人」の「生きる」の中でそれ迄出会ったことがない風俗・習慣、伝統・文化に遭遇するということは、そこに、必ず、行き違い、理解のし違いが生じうると考えられるのだが、これに伴って、その受けとめ方によって他の風俗・習慣、伝統・文化に対する好悪の感情が生まれてくるのであり、それが、占領地にあっては一方的な押しつけが多くなり、これは、統治される側とすれば反発もしたくもなることでもあるといえる。

バリ（島）の人々のうち何人の人が日本人（兵）がもたらした風俗・習慣、伝統・文化を理解し、好意をもったのだろうか。ドクター・グデ・グリアも日本兵は恐かったといていたのだが、これが、一事が万事といえるかもしれない。

もっとも、恐い、時に、恐ろしい日本兵ではあるが、その反面として、日本の占領・統治によって、バリ（島）における犯罪、中でも、オランダが阿片を輸出していたので、これに伴う犯罪が目立っていたのだが、恐い日本人（兵）の存在によってそれが減ったとオカ・シラグナダ氏はいっていた。

こうしたところに、最近、日本の植民地主義もあながち悪い面ばかりではなかったとして、これを擁護する意見が見られるようになったが、それはこうしたことがその背景になっているともいえるかもしれない。そして、ハンナは、「他の何処にも見られることのない殺戮がないままに、1945年にそれは終結したのである」と記しているのである。

そうしたバリ（島）にあって、長い間商売、特に、自転車店を営み、人々と交じりあい、バリ（島）の人々から「バリの父」といわれて慕われており、子供だったドクター・グデ・グリアも可愛がってもらったといっている、ハンナの文章にあった、島の東岸にあるサヌール海岸に上陸した陸軍の道案内をしたのを始めとして、日本人（軍）とバリ（島）の人々との間に立ってバリ（島）の人々の立場を守ろうとした三浦襄氏がいるのである。だが、戦争終結時に、氏は、バリ（島）における日本人、特に、日本の軍政下でのバリ（島）の人々のために行った自分の行動が十分な成果をあげなかったことに詫言をすとしてピストルで以て自決してしまったのである。この点について、オカ・シラグナダ氏は、「三浦という人が腹切り（切腹）をした」といっていた。三浦氏の活動していた島の中心である（現在の州都）デンバサルからは車で1時間はかかり、オランダ統治時代には他の国（王国）だったタバナン（王国）のオカ氏にとって、三浦氏の存在とはそうしたものだったということがこうした表現で以て理解できる。

この三浦氏の自決について、舟木氏は、やはり、バリ（島）の女性の言葉を介して、氏は敢えて死ぬことはなかったというのである。ここにも、三浦氏は、自らが良かれと思って、日本軍とバリ（島）の人々との間でとった行動が、結果的に自分が思ったようにいかなかったため、バリ（島）の人々に迷惑をかけたとして自死したわけだが、これをバリ（島）の人々はどう受けとめたのだろうか。

しばらく途絶えてはいるが、夫の死後、これを追い「殉死」する「サティア」の習慣・伝統をもち、「プブタン」といわれる対オランダ闘争の中でデンパサールがあるバドゥン（王国）の王とその一族に代表されるオランダ軍に立ち向かい殺されたという経験がある⁽⁶⁾、バリ（島）の人々の「死生観」からみても、三浦氏の自死は、理解し難かったといえるのではなからうか。



写真2

クルンクン王国 プブタン記念塔



写真3

クルンクン王国 プブタン復元図

厳しい方からすると、この三浦氏の自決も、バリ（島）の人々には理解されない日本的価値観の現われといえるのかも知れない。そういいながらも、氏の自決に対して感動し、かつ、涙したバリの人々も多くいたのである。

この舟木氏は、昭和18年秋に陸軍の重爆撃機で立川飛行場を発ちバリ島へ向うのだが、九州、沖縄、台湾を經由してマニラで新聞社の飛行機に乗り換え、現在はマレーシアのサバ州（ボルネオ）に属するラブアン島 Plau Labuan を経て、昭南島と呼ばれるようになっており、南方軍総司令部があり、読売新聞社の総局があつて昭南島、サイゴン（ベトナム）、ハノイ（ベトナム）、バンコク（タイ）、マニラ（フィリピン）、ラングーン（ビルマ、ミャンマー）、ジャカルタ（インドネシア）の支局を統括していたシンガポール（昭南島）へ着いたのが、立川を発つて18日目だった⁽⁷⁾。

その後、ジャカルタで飛行機を降り、そこからジャワ島を「縦貫」⁽⁸⁾する汽車で東部のスラバヤに着いたのが「立川をたつて二十余日になる」⁽⁹⁾だったのである。

そのスラバヤについて同氏は、「スラバヤは、日本人の吹きだまりのような街であった。前線へいかなければならない人たちが、ひしめいていた。飛行便は全くなく、船は、敵の潜水艦が、スラバヤ湾外に網を張っているの、動けない」⁽¹⁰⁾と記しているのである。

昭和17（1942）年2月27日の「スラバヤ沖海戦」での戦闘は日本海軍に有利に展開したのだったが、1年半の間に戦局は厳しいものになっていたということである。それにしても、そうした状況下にも関わらず、新聞社は、南海の小島バリ（島）で現地語の新聞を発行する企画を立てていたわけである。

ジャワ島の東端バニュワンギから「渡し舟」で「ギリマノというバリ島最西端の小さな集落」に到着、「そこから、海岸沿いに舗装された一車線の道が、デンパッサルへつづいている。ギリマノを出はずれた森の道ばたには、小猿が群れている。森を過ぎると、頭に竹籠をのせた、上半身裸の女が、素足でゆったりとサロン（腰布）の裾を捌きながら歩いてくる。集落の家並みが、いかにもバリらしくなった。（中略）バリ海峡をギリマノに渡ってから二時間、デンパッサルの市街に入った。街の中心に、海軍警備隊本部が駐屯している。暗闇に立つ歩哨の前を過ぎると間もなく、私たちの宿舎があった。⁽¹¹⁾「立川をたって四十一日目である。」⁽¹²⁾

筆者も平成19年にデンパッサルから当該地へ車で行ったことがあるが、今から60年前に既に道路は舗装されていたとのことで、その頃の日本の道路事情はどうだっただろうかと考えさせられるのである。60年前の日本の道路事情を知る者として、そこに、道路を始めとする「物（質）」に対する欧米、この場合はオランダなのだが、彼我の違いを感じさせられるのである。

この点については先に見た如く、ジャワの道路について、榊原政春陸軍中尉⁽¹³⁾が、また、バリ（島）のそれについては、鈴木政平氏⁽¹⁴⁾が触れてもいるのである。

そして、舟木氏は、バリ（島）赴任にあたって、「バリ島への旅立ちで、私の胸は、ただわくわくとしていた。私にとってバリ島は、この世で最も美しい、未知の楽園であった。当時、私や多くの人たちが失っていた貴重なもの、優しさ、人間らしさ、たましいを温めてくれる何かが、バリ島にはあるようであった」⁽¹⁵⁾と記しているのである。

そして、また、従軍作家として「昭和19年のころ東印度にあって、その翌年の正月の数日をバリに遊んだ」⁽¹⁶⁾というインドネシア地域に派遣され、戦後に、『晶子曼陀羅』（54）、『小説高村光太郎』（56）、『小説永井荷風伝』（60）をものし、芸術院会員、文化勲章受賞者となる52歳の佐藤春雄氏が、バリ（島）を訪問、それに伴った一文を残しているが、その中で、「自分のジャワ行きがきまった事を告げると、人々は異口同音に『序に是非バリ島へも行ってらっしゃい』といふ。（中略）バリ島の人気は大したものである。南方の楽園と呼ばれたジャワのうちでもバリが楽園中の楽園のやうな感が一般にあるらしい」⁽¹⁷⁾という文章に

みられる如き認識が一般の日本人にあったというのである。

そうしたバリ（島）にジャワ（島）から渡るについて、渡航許可をえるために当時軍政下にあったバリ（島）を統括していた海軍の本拠地（司令部）があったスラバヤの「監督当局」へ同氏が出向いた際、担当の高級参謀である中佐の「一場の口頭試験を受けなければならなかった」のである。「デンパッサル二泊（往復各一泊）、キンタマーニ一泊、シンガラジャ一泊」という予定に対し、「一体これと同じやうな予定でバリ島へ出かける人が多すぎますよ」、「時局は徒らに勝地を見学すべき時機でもなくバリ島は面白がって遊覧すべき場所でもないと思ひます」、そして、「それに交通の不便なところではあり、自動車の使用を節約しなければならない当今、一般のバリ見物は当分一切許可したくないといふ方針なのです。しかし、折角の希望ではあり、目的如何によっては特別に取扱って許可してあげないでもないが、どういふ理由で見物を希望されますか」⁽¹⁸⁾ といった、官僚主義というか持って回った対応に対して、同氏は、「インドネシアの生活が白人に荒されないで比較的純粋に守り残されている地方として、その地を見る事は東印度の宣伝資料蒐集の目的で派遣された自分の一任務であると思はれる上に、個人的な理由ではあるが芸術に携はる自分とを出来るだけ正しく謙虚に深切に見て来て、後の人々がそれによって指導精神を正しく立て、啓発手段を講じる材料を蒐集して置く基礎工事の方がわたくしの分に応じた仕事かと思ひます。仮りにわたくしに何か指導の意欲があってもこのとほりの訥弁に加へてバリの言葉が少しも通じないでは手の下しやうもございますまい」⁽¹⁹⁾ と反論したというのである。

これにより、件の海軍中佐は佐藤氏のバリ（島）行を許可したのである。ここには次のようなことが考えられる。ひとつには、氏が同中佐を説得するためとはいえ、「指導精神を正しく立て、啓発手段を講じる材料を蒐集して置く基礎工事」といった言葉を使っているわけだが、バリ（島）の人々に対する「指導精神」とか「啓発」とかといった大義名分が当時の日本人、特に、軍のような「官」の立場の者にとって大事だったのである。

それに伴って、高級参謀といった立場にいる者の杓子定規な態度、これこそが日本軍の在り方を象徴していえるのであって、この一事は、ひとつスラバヤだけにあるものではなく、当時の趨勢をみれば、陸・海を問わず日本軍、ひいては、国家全体による戦争遂行、勝利のため国民は一致団結してこれにあたらなければならないということで以て、硬直化が行き渡っていたといえるのである。それも厳しい戦局になればなる程それは更に進むのである。

佐藤氏のバリ（島）滞在の予定は、デンパサール2泊（往復各1泊）⁽²⁰⁾、キンタマーニ1泊、シンガラジャ1泊という極く短いものだったわけだが、バリ（島）東北部のカラガッサム（王国）へ行き、そこでの宿泊のためにキンタマーニ、シンガラジャでの宿泊をとりやめての滞在となったわけであるが、日本語を話すカラガッサムのラジャ（国王・藩王）とその妃の歓待に心動かされたようである。



写真4

カラガッサム王国 王宮 (Puri 館)



写真5

カラガッサム王国 王宮庭園

そこでの体験について、「現在の王は年齒^{ねんし}五十四歳（中略）、王は巧みな日本語を操るが、王妃は全くこれを解しないといふ。言葉の通じない相手に対する場合、最もよく現はれるものであるが王妃は才気横溢の様子で無言裡に愛想よく客を応対した。晚餐の食卓にも王妃が自身で給仕した」⁽²¹⁾と、国王（領主）夫婦に好感をもち、更に、「二十幾人とかある子供の一人は、現に選ばれて日本遊学の途上多分今ごろはフィリピンにゐるだろうと言って日本を讚美する親日ぶりもわざとらしくなくて要領がよく、その巧みな話術にも才幹^{おのずか}の程が現はれ、眉宇の迫った利かぬ気の風貌のうちにも下賤でないものが、自らに小国ながら王者たる品格の争はれないのを示してゐた」⁽²²⁾とも記しているのである。

昭和17（1942）年1月に偵察隊が、2月には陸軍部隊がサヌール海岸に上陸したことから日本軍の占領・統治が始まったわけだが、佐藤氏がカラガッサムの王宮を訪問したのが、昭和20（45）年で、この間にカラガッサムの王は日本語を巧みに話すようになっていたといえ



写真6

カラガッサム国王



写真7

カラガッサム国王 (Raja 藩王) とその家族

るのだろうか。

国王の息子が日本に「遊学」したと佐藤氏は記しているのだが、これは何を意味しているのだろうか。そして、戦後、彼がどうしているかということについてを記しているが、これらは今後の研究課題の一つといえる。

そして、佐藤氏は、「キンタマニ山上の一泊の予定は即座に変更した。途上の一旗亭に茶を求めると、ここで偶々相前後した大仏次郎氏の一行を見かけた」と、また、「図書館で古書の挿画を見る事は我々よりも早くバリに遊んでゐた坪田譲治が夙に着目して自分に教えてくれてゐたところであった」⁽²³⁾とも記しており、当時、文壇や画壇を代表する作家達が各地に派遣されており、バリ（島）にもこれらの人々が訪れていたことが知れる。

こうした人々がバリ（島）を含むアジアの地でどのような活動をしていたのか。中には積極的に軍に協力した者も沢山いたということを知るのである。彼らの中には自らの信念に基づいて行動した者もいたが、時勢柄これに従った者もいたのである。

同じく海軍報道班員として『従軍日記』を残しており、『鈴木主水』で昭和27年に直木賞を受ける久住十蘭氏は40歳になる昭和18年4月、台北、マニラ、ダヴァオを經由して、日本海軍が最初の落下傘降下を行ったセレベス（スラウェシ）島のメナド（マナド）を始めとして、バリ（島）を訪問した気配はないが、インドネシア地方に派遣された氏は、肩章こそ着けてはいないが、軍装をし、将校と同じような軍刀をもった写真を残しているのである。⁽²⁴⁾

こうした姿をみることによって、当時、作家を始め、画家等の文化人といわれた人々が戦争と関わることになったわけだが、そうした中で文化人と軍との関係について知ることが出来るといえる。

そして、久住氏は赴任の途次、海軍中佐と一緒に車に乗ることを嫌がったり、陸軍中尉と相部屋になったと記していること等から、明確な階級は分からないが、軍刀をもった写真から見ても将校待遇だったことがいえるのである。

だが、しかし、佐藤氏も記している如く、氏に対応した海軍中佐には不愉快な思いをさせられながらバリ（島）行の許可をえたということからみて、これら文化人の立場が奈辺にあったかということを知ることが出来るともいえるのである。

そして、こうした文化人の中には、「戦威昂揚」の掛け声から積極的に協力した者と、必ずしもそうでないといえる者がいるが、戦争という大きなうねりの中では軍人といえども、個人としてその思いを致すことが出来なかった状況の中で、こうした文化人達はその「生きる」を翻弄されたということは出来るだろう。

新聞記者だった舟木氏もバリ（島）赴任中に幼な子だった長男を病気で失うという悲劇に会っているのである。⁽²⁵⁾

結

「大東亜（太平洋）戦争」中のバリ（島）での日本人の在り方について考察してきたが、今日でもいわれている「地上の楽園」というイメージは、既に、この時代にもいわれていたということである。佐藤春雄氏は「楽園中の楽園」ともいっている。この点については、ドイツ人画家スピーズノによって1933年にアレンジされ、今日、バリ（島）を代表する芸能となった「ケチャ（ク）・ダンス」や、ガムラン音楽を伴った「レゴン・ダンス」の幽玄な演技を見ることによってもそれを窺うことが出来るし、1936年に出版されたコバルビアスの著書『バリ島』⁽²⁶⁾からもそれを感じさせられるのである。

1900年にギアニヤール（王国）がオランダ領になったのを皮切りに、20世紀初頭にはオランダの支配を受け、半ばには日本による統治が行われ、「地上の楽園」とは裏腹に厳しい現実があったにも関わらず、そのイメージは損なわれなかったのである。

そして、この「地上の楽園」には、恐ろしい日本兵がいたのだが、他の地域におけるように、戦闘における殺戮がなかったことと、戦争終結時に大した混乱を来すこともなく、比較的容易に武器をバリ（島）の人々に引き渡し敗戦処理を行ったということでも、「地上の楽園」ということがいえるのかも知れない。

やがて、日本（軍）による「独立」の約束もあって、インドネシア地域（オランダ領東インド）各地に「独立」のための戦いがオランダとの間に展開されるのだが、ジャワ（島）の人々が中心となったこの運動に、バリ（島）の人々は距離をおいていたのである。

そこには、イスラム教のジャワ（島）とヒンズー教のバリ（島）との風俗・習慣、伝統・文化の違いからくる互いの違和感、そこから来る警戒心、これは、風俗・習慣を形づくるだけに止まらず、「人間」の「心」に関わる問題を伴っており、事は面倒となり、その融和は難しい面があるといわざるをえない。

信仰心が強ければ強い程他のそれを受け入れることが難しくなるのであって、それによって、古来、多くの争いが繰り返されておられ、現代社会にあっても、未だ、これが払拭されないのである。「寛容」と「許し」を説く宗教のもつもう一面か。

ジャワ（島）の人々の運動とは距離をおいていたとはいえ、一部の者はオランダ（軍）に対して抵抗し、「現代のププタン」といわれる死を遂げたのである。そして、その英雄としての行為が称えられ、デンパサール国際空港に指導者だったヌグラ・ライ（大佐）の名が冠されているのである。

注

- (1) この点について、『「軽機関銃班、前へ』。1人の中国人老農夫が地面に引き据えられ、腕に発電機の端子を付けられ、まさに電流が通されようとする瞬間を、多数の農民が凝視していた。日本軍の狂気の沙汰である。

44年晩秋、東亜同文書院大学予科2年だった私は、員数不足著しい軍隊の補助要員として軍米の買い付けをする商社員の護衛に徴用された。私達学生は階級章の付かない軍服を着せられ、上海市から軍用トラックで数時間走った朱家角という農村（現上海市清浦区付近）に行った。買い付けとは名ばかりで、着いた農村では農家を家宅搜索。寝台の下から土間から樞までも暴いて種もみ用の米まで根こそぎ徴発した。それでも成果が上がらない時は号泣する農民に見せしめのための拷問を行った。

私たちが去った後には国府軍や中共軍が来て、日本軍に協力したと村落の長の処罰が頻発したらしい。農村を回る数日の間、徴発品で豪華な食事をする日本軍を見る中国人農民のいかばかりかと、私は心底から同情する他なかった」（「根こそぎ徴発 老農夫を拷問」『語りつぐ戦争』＜朝日新聞 2009年（平成21年）10月19日 月曜日 朝刊＞という投稿が掲載されていた。

- (2) 'Life in the 1930s ; Japanese Occupation' Willard A. Hanna "Bali Chronicles" Periplus Singapore 2004 pp.204~206
- (3) ibid pp.206~208
- (4) 舟木麻左『バリ島の日本人』近代文藝社 1993 151頁
- (5) 同上書 100頁
- (6) 同上書 98頁
- (7) 同上書 156頁
- (8) 同上書 159頁
- (9) 同上書 159頁
- (10) 同上書 159頁
- (11) 同上書 165~7頁
- (12) 同上書 168頁
- (13) 榊原政春『一中尉の東南アジア軍政日記』草思社 1998 173~4頁
- (14) 鈴木政平『日本占領下バリ島からの報告 東南アジアでの教育政策』草思社 1999 11頁
- (15) 舟木 前掲書 151頁
- (16) 志賀直哉, 佐藤春夫, 川端康成監修『世界紀行文学全集 第十四巻 南アジア編』修道社 昭和35 119頁
- (17) 同上書 120頁
- (18) 同上書 120頁
- (19) 同上書 121頁
- (20) 同上書 120頁
- (21) 同上書 127頁
- (22) 同上書 127頁
- (23) 同上書 126頁
- (24) 久生十蘭作, 小林真二翻刻, 橋本治解説『久生十蘭「従軍日記」』講談社 2007
- (25) 舟木 前掲書 151頁
- (26) Miguel Covarrbias "Island of Bali" New York 1991

Research Note

The Social Climate and Lineage in Bali

MATSUBARA, Masamichi

Last time, I researched about the background 'Daitoua Sensou (the Pacific war)' connected with Bali and Balinese.

This time, I try to research the relation between Balinese and Japanese, especially, Japanese persons of culture using author Funaki Masa's novel 『バリ島の日本人』.

In the time of 'Daitoua sensou (the Pacific war)', many of a persons of culture included author, painter, Journalist etc., were send to the front to report the war situation. And some of them went to Bali (island). Then, almost of them wrote about Bali as 'The earthly paradise'. However, there were many problems connected with Japanese (soldier). So, I try to research about problems or troubles between Japanese (soldiers) and Balinese.